

追悼文集

兄を送る

望月しげ

兄さんあなたがあの世から便りを下すったので、私も思い出したまゝを書き送ります。丈夫になって、帰って来れると信じ張り切って出かけた病院で、その日のうちにあんな悲しい悲しい別れ方をしようとは誰が予期した事でしょう。あのみぞれ降る師走の夜更の町を、あなたの亡きがらを抱いて、涙にふるえながら帰った淋しさ、悲しさは、我家にとって生涯忘れる事はないでしょう。いつまでも丈夫で一緒に暮してゆける、それが当り前のように考えていた甘さに、今更自分で腹が立って、やりきれなさでいっぱいです。

八十九才の年寄りがいつも家中を明るく、暖かく包んでくれ、私達は若いくせに、そのあたゝかさに支えられて何十年も暮して来ました。

あなたは実に意志の強い、一生をゆるがぬ信念に忠実に生きぬいて来た人、その点は何彼につけて常に頭の下る思いで見つめて来ました。でもその半面相手を思いやる心があるのか、柔和さとなつて、判らない事は何

時間でも話しては相手を納得させる心の広さをもっていましたね、若い時から面白い逸話を持っていましたが、昔銀座で図案社をしていた頃、そこは若い人達のたまり場にもなっていて、たまたま電車代にもことかく人がやって来るので、あなたは黙って財布を出す、これもたくさん入っている苦もないので、渡された人は中身を全部持って行ってしう。そんな時は、「あゝ今日も交番で借金をして来たが明日は返しておかなくちゃあ」とすき腹をかゝえて帰って来る事も度々で「まあ又交番で」とよく笑ったものでした。

この四、五年は自分が外に出る事も殆どなくなったので、「今月は誰々がアミにかゝったぞ」(カスミアミの意味)と言ったり「線香なんか何本立ても仕様がない、生なまのうちに会いに来てくれ」と来る人毎に友達なつかしさによくさそいをかけたものでした。こんな事で年中お客は絶間ないほどあつてにぎやかでした。

これからは今迄のようににはゆかないでしょうけれど、兄さんの丈夫な時と同じように淋しくも明るく暖かい家の中に、家族より合つて暮して行こうと話合っています。生きているうち一人でした事は殆どなかったあなたの一人旅この寒空にもうどの辺まで行った事でしう。

二月七日

画家としての望桂さん

望 月 百合子

大正昭和期の同志の中で望桂さんほどこだわりのない温かさを持った人は他にはなかったように思う。望桂さんは絵描きだから絵はたくさん描いたが文は余り書いていない。だから理論的な大論文や著書があるわけではないので、後世に思想家として残るには他の学者や文筆家よりむづかしい面があるかも知れない。しかし望桂さんは他のどんな高邁な理論家にもない人間的の温かさと正しさと骨身惜しまぬ行動力の持主だったことは今更云うまでもない。獄にいた同志のためには脚の不自由もかまわず、幾度でも何処までも出向くことをいとわなかったのは恐らく望桂さんだけではなかったろうか。また同志からそう甘えられる人柄であった。同志が追われて飛び込んでくれば一家を挙げてかくまったのも望桂さんだった。望桂さんの生き方をみると同志の救援のために西に東に走りつづけたような気がする。しかもそれが只ひとり望桂さんだけでなく、夫人のふく子さんも、その妹のしげ子さんも一心同体になってのことだった。

望桂さんは美術学校出の画家だけれど、決して金持の応接間を飾る絵は描かなかった。社会を諷刺する漫画

を描いて僅かに生活の資を得て金は一切を挙げてアナ運動に投入した。この漫画というものの、望桂さんにとって生活の資ではあったが、しかしそれを通して望桂さんは自分の思想を表現していたと云える。

では望桂さんとは漫画しか描かなかったかというところではない。漫画を描きながら望桂さんの頭にはいつも人間本来の美への憧れがあった。只それを表現して金持の玩具にしなかっただけだ。ある夏の日、私は望桂さん、しげ子さん、子息の明美さんに案内されて安曇野の礫山館を訪れた。門を入ったばかりの木蔭に労働者の坐像がちつと何かをにらむように据えられてあった。それは左腕の部分が省略されてがっしりした手だけがむんずと何かをつかんだ形で強調されている像だった。しげ子さんと私はその像をしばらく見ただけで他のものに眼を移し、五分もたつて望桂さんが尚その像のところ立っているのに気がつきひき返えてみておどろいた。ほんの僅かの間に望桂さんはその労働者の像をすっかりスケッチして、しかもそれが像そのまゝに生き生きとしている。エンビツ一本でそのブロンズの立体感、力量感をそのまゝに描き出したその力に、私はいまさらにもこの人を画家として見直す思いがした。誰にでも何にでもこだわりのない温かい手をさしのべる人柄からは思いもよらぬ

望月さんの終始

近 藤 真 柄

望月桂さんからの最後の手紙は、昭和50年7月11日松本南局消印の葉書である。丁度その頃、平岩巖氏、添田知道氏のお骨折りと御厚意で、父（塚利彦）の句帖（豊多摩と二度目の果鴨）という和綴りの筆跡本を出して頂いたので、一部献本したのであった。

「出た、出た。素晴らしい堺先生の俳句集御贈与、有難く、五〇〇（限定本）の中へ加わえられ、誠に光栄。何辺繰り返しても飽きることなし。美しい意味溢れるもの、思えばかつて久太の骨灰で咲かせた月見草の押し花を、先生に贈ったら、とても喜んで呉れた。

今庭に月見草が咲き初めた。

というもので、ペン画の月見草の一莖が書き添えてあった。筆跡も活達のものであった。

御本人の意見としては、今年の年始状も書いて頂いたのだが、時既に早くで、和田久さんのあの世から花を咲かせたのに 一対して、あの世からの年賀状となった。

最後にお逢いしたのは、ふく子夫人のお葬式には、間に合わず、おしげさんの旧友でもあり、私の友人でもある人と、お墓詣りに明科のお家に伺ったときであろうか。

全く異質とも見えるこの人の美に寄せる思いとその画才を始めて見つけた思いだった。そしてこれほどの天才的なものを持っている人が、もし自分の欲望だけに忠実に生きる人生だったら八十才をとうに越した今ごろは芸術院とやらの会員にもなっているようし、号何十何百万という値でその絵が金持に買われ富裕な大画家として奉られていただろうに、敢えてそうなる道を選ばなかったこの人こそまことの人間、真に人間を愛し、その人間が当然持つべき仕合せな生き方のために生涯を捧げた人だと思った。

望桂さんは画家として高名にはならなかったかも知れないが、八十九才で亡くなるまで同じ心の家族にかこまれ、どんな富裕な大画家よりもしあわせな老年の生き方だったことを思うとしみじみ美しいなあ、と思う。これは私のどんな先輩同志に対するよりも強い思いである。

尚つけ加えておきたいことは望桂さんが殆んど一筆で描いた大杉の姿、それはどんな写真よりも大杉を表現している。金子文子を描いたものもどの写真よりも文子その人を描いている。これこそいつの世にか社会の宝になる日をと望んでやまない。

一寸も昔と変らない元氣な望月さんで、カスミ網を張って、引っこくって訪ねてくれる人をたのしみに待っているんだと大笑していられた。

これと前後しているかも知れない。近藤憲二の死後、望月さんの一世一代の代表作である大杉栄の画が掛軸になっているのを、大杉さんの遺族にお渡ししようかと思つたが、一寸望月さんも手許に欲しいと云つておられるのを聞いて、望月さんにお納めすることにしたとき、望月さんはおしけさんと二人で出京されて、お手渡しした。これが最後かな。

千駄木町の家、駿台クラブのパレット社、銀座裏の事務所、幡ヶ谷の家のその時々場面が、頭の中に浮ぶのであるが、一番古いのは、望月さんの画に父が字を書いて、売らたて会をしたことである。

場所も目的も子供の私にはわからなかったが、幾らか売れたような話が残っている。その絵の一つ、まるい黒い玉に一筋の煙が上っているのが、かなり多くあった。父の書いた始めの五文字を忘れて、出てこないのが、想い出し思い出して、こうではなかったかと思う。「天下泰平、毬の蹴りたき日永かな」。

望月家又は他で御所持の方もあるかも知れないので、御訂正を願いたい、私には、ひどく印象的な画であつた。

(再掲…リベルテール本年2月号)

笑竜に低頭する

添田 知道

「旧臘父が新年の為に描きのこしましたこの一葉が、すでにあの世からの御挨拶となりました」と明美さん書添へのある、年始ハガキの画を、眼の前に立てかけ、眺めては望桂さんを偲んでいる。

雲竜の墨絵に「笑竜暗雲を吹っ飛ばし」とペン字を走らせてある。その笑竜を讀めてみると、それが望桂さんの自画像として映ってきたりする。妙なかな。

四、五年前になるうか、塔ノ原のお宅へ伺へたのはよかつたなと思ふ。大宮の望月憲同行、その車で運ばれたのである。峠で日が昏れて、明科の町はもう夜だった。やっと辿り着いて、灯の部屋に通されるや、艶々とした顔の望桂さんの放談が止まらない。文通こそあれ対面は、この間何十年相違ち申候Vだったのだから。圧倒された。羨望的元氣だった。

二階にねかせてもらつて、朝下りしてみると桂さんは何やら仕事をしてゐた。知らぬ間にわが白髪面が色紙に写されてゐたりもした。休みなき仕事の人といふのに

た。

今ここで、とやかく云っているより、あの世へ行ってきけば、早く判るのだが、これも思うようにには行かないから仕方がない。

この世では長老でいらしたたが、あの世では新入りの望月さん、遠からずお目にかゝりましょう。皆さんによろしく。

(51・2・23)

笛吹けど踊らず

議會の乗つとり
りや田の草とり



打たれた。御馳走は自家菜園の物だった。自然食といふ言葉はあつても、その実にはありつけない東京者には、腸を洗はれるやうなすがしさであつた。ありがたかつた。こうした環境からの発想こそが、人間の本音になるのだなと思つた。

「いつでもやってこいよ。公害汚染の東京なんかで喘いでるなんてバカだよ」

その通りである。その後望桂さん最後の旅行で、東京へも来るといふので、会合した。その時も、「こんなところへ、二度と来るもんか」

の連発だったのを思い出す。痛烈。罵倒はそのまま文明批評なのだ。なんと、怒りのない世になったものだ。

駿河台に事務所を持ってゐたのは、大正の何年頃になるうか。そこへも時々訪ねたものだったが、そこで出してゐた雑誌の名を、もう思い出せなくなつてゐる。その誌へ何か書かされたことがあつて、まさか原稿料なんか出るなんて思はなかつたのに、「金三円也」をもらつてびっくりしたことがあつた。

そんな、金のことだけ覚えてゐて、誌名を忘れてゐる。それは望桂さんの仕事を忘れてゐることになる。相すまない。どうしても望月桂の軌跡を追つてみる必要がある。それは「人間の歴史」を見ることになる。

望月桂さんの旅行

『有島武郎氏の死』

和田 栄 吉

大正十二年六月の中旬、私と桂さんとは二人で信州の岡谷にいた。それは七月からはじまる松原湖畔の信州夏期大学に講師として信州入りする有島武郎さんを待ちうけていたのである。

前年、大杉さんが日本を脱出してフランスに渡る計画があったころ、労働運動社の内部で、この有島さんの信州行を利用して、信州の各地で文芸講演会を開いたらどうかということが企画され、有島さんからも承諾を得て、その先乗として私と桂さんが信州入りしていた訳だ。もともと信州という土地は文学に縁の深い土地柄だったから、松本、諏訪、長野、小諸、飯田の各地で学校の夏期休業中の講堂を借りて会場とすることにして、その交渉は和田が担当し、会場の飾りは桂さんが引受けてくれた。一応の準備ができたから二人で信州入りをした。

今でも覚えてるが、その際会場に飾ったかどうかというので四点ほどの書や絵を持って行った。中でも印象に残っているのが桂さんの画に大杉さんの賛のあるもので、図柄は画面一杯に大きく落下する滝が描かれていて

巖頭に若い男が滝壺を見おろしている図に「巖頭の感でも読みそうな男かな」という大杉さんの賛が添えてあったが、どうもこの句は和田久さんのものらしかった。これはもちろん日光の華厳の滝に投じた藤村操のことを諷したものだ。その他、和田久さんの独特の字で大きく、「金魚掴み殺したる生欲の悩み」という句があったが、この「掴」という文字がいつまでも私の眼底に残っている。

さて、私たちは夜になると下諏訪までいって温泉に浸ったりして二日ほど待ったが有島さんからは連絡が来ない。もともと六月の下旬に軽井沢に来て、四五日したら連絡があることになっていたのが、どうも変だと思っていたところに新聞に軽井沢での秋子女史との出来事が報ぜられて私たちは呆然としたものだ。有島さんの死に対する批判のようなものもそのころたくさんジャーナリズムでとりあげたが、現在のようなものとは大分次元が違っていた。私たちは諏訪湖畔から有島さんたちの冥福を祈って悄然として東京に帰った。

なほ辞世として伝えられているものは

雲に入るみさごの如き一筋の

恋とし知れば心は足りぬ

(昭和五十一年栄)

貧時交

北 浦 馨

それはまさに、「貧時交」と謂ふべき時期でした。菊岡久利がその詩集で云い切ったような、首輪をもたない犬が、毎日街中をほつき歩いて、反逆の思想のうちに狩猟民のごとく獲物を探し歩いた時代です。

その頃「望桂サン」は銀座で「パレット図案社」の看板をかけ、電通の仕事を始め、銀座の酒場や喫茶店の宣伝マッチまで手がけて、われわれがひょっこり寄ると例の無口で無愛想だが、心の温まる一杯のお茶を入れてくれたものです。故前田淳一などは、毎日のように、自分のオフィスのように出入りしていました。その事務所の裏側のアパートには、晩婚だった岩佐作太郎翁が家族と棲んでいた。「望桂サン」は持前の人柄で、翁らの「夫婦ゲンカ」の仲裁まで立会ったようです。そのパレット社で働いていた若者たちのなかには、三上君のように今は一家をなしている人もいました。またその後「鑑真」の研究で有名になった早大教授の安藤更生なども出入りしていました。「腹が減れば食らい、眠くなれば眠る」といふ状況だったようです。

あの頃金があると、或いは誰か金をもっていると、よく資生堂のフルッツバーラーとか、コロムバンでお茶を飲み、二階から地上を見下しては、その日の獲物になる相手を探したものです。それらの人々の多くはみな鬼籍の人となりました。新居格・石川三四郎・高田保をはじめ、「石狩川」の作者である同郷の本庄陸男に逢ったのも、武田麟太郎、林房雄、高見順、新田潤、山之口鏡に逢ったのもその頃です。よく飲み、よく語り、明日を信じたわれわれの拙い「青春群像」がありました。それらを通して、我儘で、無礼で、どうしようもないような「無頼人」をよく、「望桂サン」は面倒を見てくれました。懐かしい飯屋には、安くて、うまかった「魚治」といふ定食屋もありました。われわれの肉体を支えた何割かはこの飯屋があつたお蔭です。また「岩崎」といふ平民社に關係のあつた人らしく、われわれに金のない時にはたゞで飯を食はしてくれたものです。

その後岩佐翁は千葉あたりの無住寺に巣をみつけて移転、「望桂サン」も甲州の故郷に帰ったことを聞いていました。「望桂サン」は昨年百点を越す「個展」を開かれ、作品も評判が良く、有終の美を飾ったことであります。

それにして、われわれが「望桂サン」の絵に接した

最初は、大杉栄の自叙伝（大正十二年・改造社発行）の扉にある方本運動終刊号執筆中の大杉君（望月桂氏筆）といふ、杉が裸かで、肉太の万年筆で、原稿用紙に向っているスケッチです。

いまこゝに「ウラ哲の野狐禅」などと辻潤に云はれながら、詩と酒と哲学に終始して逝った鉄心和尚の（うらべ・哲次郎）の詩箋があります。これは先年望月百合子氏から贈られたものです。

六尺の大いな身もてなんぞ跼蹐するぞ

人生五十年豈に窮するを愁えんや

君に勤む阿蘭若を一蹴して

大法を流通せよ西又東に

住院の僧を嘲る道人の一喝です。

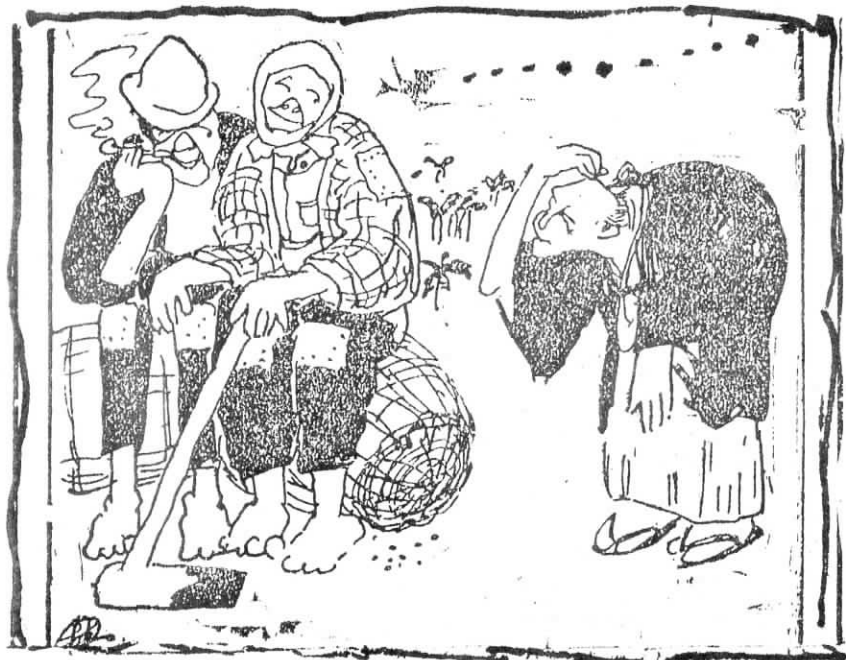
こゝに無茶苦茶に生きてきた人とわれわれの共同分母があるような気がします。無茶苦茶な体験のない人間は真物ではないような気がします。「望桂サン」の追憶がいろんな風に飛んで仕舞いましたが、思ひは矢張り「奇風疾風怒濤時代の貧時交」と称すべきでありましょう。亡きものはなし牙え極りし昨日今日（馨）

モチケイさんを憶う

古河 三樹松

私の望月桂さんとの出会いは、本郷駒込片町の労働運動社に出入した頃で大正大震災の少し前であった。望月さん一家は本郷千駄木町の横丁を入った閑静なところで五十余年たった今でも庭の石仏やきれいに咲き乱れていた山茶花の情景などなつかしく懐に思い浮かぶのである。望月さんはアナ系唯一の画家であり、また漫画家で、「漫文漫画」（大杉栄と共著）や大杉さんが肌ぬぎになつて一閑張りの机を前にした後姿を描いた絵は、林俣衛画伯の「出獄の日の〇氏」と共に大杉を描いた傑作として有名である。

望月さんは、大正・昭和期を通じて第一線に立って活躍、いわは大杉の客将ともいふべき位置にあった。朝鮮人グループや水平社運動にも深く関係あり、農村運動同盟を設立、「小作人」を発行。郷里長野を中心に農民運動に取組み各地で多くの農村青年の支持を得た。また望月さん一家の方々は亡き福子夫人はじめ、今なお健在の義妹おしげさんなど皆善良で親切、世話好きで、冬の夜望月家のコタツに集まって老いも若きも慰め励まされたものである。望月さんは片足が一寸悪かったし、運動の



表面に華々しく出るよりも地道に根強く縁の下の力持の役割を負った人だが、傷つき倒れた多くの同志が、どれだけその支えに勇気づけられたことか。

大正十一年伊豆天城山中、大雪の猫越峠で久板卯之助さんが凍死した時も、望月、岩佐作太郎、村木源次郎さんら、三人が現地へ駆けつけたし、その小さな追悼碑の文字は望月さんの絵筆で書かれた。

十二年十二月、大杉さんら三人の合同葬が谷中斎場で行なわれる日の朝、労働運動社へ焼香を口実に紋付姿で現われた大化会（右翼）の下鳥繁蔵らがピストルを乱射、遺骨奪取騒ぎがあった。逃げる奴を他の同志と一緒に追跡した望月さんは、近藤憲二さんに組みつかれて倒れた下鳥の頭髪を引っつかみ、下駄で顔を「コン畜生！」とばかり踏みねじってやった、と当日私に笑って語られた。何時もニコニコとあたたかい人柄でやさしかった望月さんのその胸底にひそむ烈々たる闘魂には驚き打たれたのであった。

大杉らの復讐に失敗、捕われた和田久さんや村木源兄、テロリスト古田大次郎らの世話も望月家の人々は本当に親身になってやって下さった。

大正十五年朴烈大逆事件で栃木女囚刑務所に無期囚の金子文子を訪ね、彼女自殺の十数日前の文子の面影を写

生した望月さんの鉛筆画は、貴重なもので文さんの「何が私をかうさせたか」(黒色戦線社版)を飾っている。

昭和三年二月、和田久さんが秋田の獄で惜死。望月さんは近藤さんと共に秋田へ飛び遺骨を引取る。

後日になって望月さんから押花一輪が封入されて私宛に左の様な手紙が来た。

「あの世からの花」と題し、「突然ですが、故人和田久太郎君が生前「後事頼み置く事ども」の中に『僕の死灰も此の肥料方法で処分してくれまいか。あの世から一と花咲かせて見たいといふ洒落っ気さ。この事は望月家の人々にお願ひしたい。と思ふ……花は……月見草……』云々にもとづき、目下の百姓凡太郎にふさはしい仕事と存じ、美事に咲いたは久太郎！水位は飲ました世話で咲かせた凡太郎の手なみもお目にかけ度くと、一輪お送りしました。永遠に友と離れたがらない久太郎君をどうぞお愛し下さい。」

望月桂(犀川凡太郎)年譜

昭和四十四年の夏から自分でまとめにかかった大学ノート十五・六冊の「年譜」「随筆」からの抜き書で年令は絵に自分でかいた数え年である。(古川時雄)

久さんの骨灰で咲かせた月見草の押花は、今も私は望月さんの便りと共に大切に持っている。

久さんが獄中から望月さん宛の手紙に「君の様な人は陣の背後にあって補助的事務をやってくれ。傷つき倒れた者の病院になつてくれ。これ亦大事業だ。最大必要事だ。」

まったくその通りの生涯を、九十才まで貰った望月さんであった。

今、大逆事件田縁の地、信州明科の小高い丘の中腹に望月さんは永遠の眠りについていられる。棺・常念など北アルプスを遠望に、穂高明神の森もほど近く、筆名犀川凡太郎と名乗って、最も愛した犀川の流れも美しいところである。モチケイさんと皆から親しみ愛された望月さんの死はまことに痛恨の極みだ。もっともつと長生して色々昔の話を若い人々に語り続けてもらいたかった。

明治二十年(一八八七)(一才)

一月十二日、長野県東筑摩郡中川手村塔の原(現・明科町)に生れる。

明治三八年(一九〇五)(十九才)

三月、中学卒業を前に父の希望が医者だったのをきらって画家になるため家をとひ出し雪山を越えて上田から乗車して上京したが凍傷になり手術した。飯田先生の紹介で彫刻家の書生になり、高村光雲、藤島武二の塾に通う。光太郎と画架を並べて勉強した。

明治三九年(一九〇六)(二〇才)

九月、松本中学の卒業見込証明書をもって受験して東京美術学校西洋画科に入学。教授は黒田清輝、藤島武二、和田英作、岡田三郎助など、同級生は岡本一平、池部鈞、藤田嗣治、近藤浩一路など。

明治四三年(一九一〇)(二四才)

三月、美校を卒業、野沢中学に奉職するが翌年四月には辞職。

明治四四年(一九一一)(二五才)

明科は所謂大逆事件の宮下太吉が爆弾の実験したところで、明科駐在小野寺巡査が功労章を光らせながら手柄話をしているのを聞いた。引続いて製材所、県庁に火災があつて死刑にされた宮下太吉の業火だと村中にうわさされた。

大正四年(一九一五)(二九才)

二九才で小諸の中村ふくと結婚、五年五月神田猿蓑町に氷水屋を開業、蜀山人にちなんで「へちま」を屋号とする。久板卯之助を知り、渡辺政太郎、村木源次郎、近藤憲二、和田久太郎を知る。

大正六年(一九一七)(三一才)

六月久板の紹介で大杉栄を知り、堺利彦と違った潤いを感じ意気投合す。

大正八年(一九一九)(三三才)

九月、革命芸術研究会開催。黒耀会結成。

大正九年（一九二〇）（三四才）

四月、黒耀会展を開く。

五月、第一回メーデー参加、上野署に検束される。

九月、『労働運動』編集のため千駄木の家で仕事をした大杉栄の裸像を描く。

大正十一年（一九二二）（三六才）

十一月、大杉栄との共著『漫文漫画』アルスから出版。

大正十二年（一九二三）（三七才）

九月一日、関東大震災。憲兵隊の監視の中を駒込署に連行され、十月五日まで留置。この間に大杉栄、伊藤野枝、橘宗一少年の虐殺を知る。

十二月十六日、三人の葬儀を谷中斎場で行う。この朝、反動団体に大杉の骨は持ち逃げされていた。

昭和三年（一九二八）（四二才）

十一月十日、岡本一平を訪ねて漫画の先輩に意見を聞く。「これでは売物にならんぞ」と言われたが、読売新聞の宮崎光男を訪ねると社長の正力松太郎に会わされる。本名では困るというので生れ故郷の名をとって岸川凡太郎という合作の名が出来上り、読売新聞社に入社、翌日の新聞から大きく取扱ってくれた。

昭和八年（一九三三）（四七才）

四月、読売新聞社退社。フリーになって新愛知、など四社連盟に議会漫画を書く。

九月、平凡社に入社、大百科辞典の挿絵を書く。

昭和十三年（一九三八）（五二才）

三月、漫画雑誌『爆笑』発行。美校仲間の池部鈞、藤田嗣治、前川千帆、小野佐世男その他大勢。

昭和二十年（一九四五）（五九才）

東京の爆撃が続く、寮生男女百三十名を連れて故郷に疎開した。小学校の教室と体操場を借りた。『昭和十六年凶案社の仕事もなくなり、高島屋工業の青年学校教師寮舎監となる』

八月十五日、終戦。「万才」とのどまで出てくるのをおさえて、翌日には資材の生地布を分けて背負わせて寮生を帰すことが出来た。

昭和二十一年（一九四六）（六〇才）

一月、部落の農民組合が出来た。政党色を除いた組織にして秋には東筑農民組合連合会の組合長、二五年には全国農地委員協議会理事におされる。

昭和三十年（一九四五）（六九才）

四月、松本松南高校の美術科教師となる。

昭和四十六年（一九七一）（八五才）

三月四日、二月から風邪で枕を並べていたふくの病勢が悪化して遂に永眠。

昭和四十七年（一九七二）（八六才）

一月、川崎のまんが寺常楽寺に「雪舟とねずみ」、続いてテレビで見た横井庄一のジャングル生活を描く。

昭和四十八年（一九七三）（八七才）

人生漫画を描き続ける。

昭和四十九年（一九七四）（八八才）

続人生漫画、社会漫画を描き続ける。

昭和五十年（一九七五）（八九才）

二月、内孫誕生、透と命名。

四月、信州新町美術館で初の個展を開いてもらう。感慨無量であった。

十二月十三日、厳寒を越すために入院したが夜八時十七分永眠。